

虚心坦懐に読んでみたら、どうなるのだろうか 桜美林大学大学院招聘教授 潮木守一

数年前、竹内先生とたまたま会う機会があった。ちょうど『大学という病』を書き終えた直後のことだった。先生はぽつと「いつか蓑田胸喜のことを書きたい」ともらした。「これははまるのではないか」と予感したが、その通りになった。蓑田胸喜の名前は「旋風20年」で知った。中学生の思考力をもって、どの程度理解できたのか、おぼつかない。ただ「むねき」としてではなく、「きょうき」として、その狂気に近い言動とともに記憶に残った。虚心坦懐に読んでみたら、この記憶はどうなるのだろうか。

近代教育史研究にとって看過しえない重要史料 東北大学大学院教授 梶山雅史

『大学という病』『教養主義の没落』、あるいは『キングの時代』『言論統制』等々、射程の深いシャープな力作が、大学史・メディア史の書きかえを迫っている。その卓抜な著者達によって『蓑田胸喜全集』が企画され、蓑田の言動の全貌が全7巻に集成され刊行されるという。「国体明徴」運動の高波に文部省が教育・思想統制を強化、加速していった道行き、その深部に放たれていた「狂信的な国家主義者」の情念と論理がどのようなものであったか、近代教育史研究にとって実に看過しえない重要史料の出現である。

今後の日本近代史研究に大きく貢献 京都大学・京都橘女子大学名誉教授 松尾尊兌

蓑田胸喜は滝川事件や天皇機関説事件に火をつけた狂信的な「学匪」として余りにも悪名が高い。しかし彼に筆誅を加えられた岩波茂雄は敗戦直後その自決の報を聞き、「やはり本物であったのか」と香典を贈った。自己の信念に殉じたこの右翼教授に学問的な関心を払う人は極めて少なく、ようやく博士論文が一つ出現した程度である。このたびの全集は蓑田の言論の全容を初めて明らかにし、昭和思想史の暗黒面に新しい光を当てることにより、日本近代史研究に貢献するところが大きい。

蓑田胸喜という問題 評論家・麗澤大学教授 松本健一

日本=原理主義(ファンダメンタリズム)の問題を考えようとして、わたしは四半世紀まえ、蓑田胸喜の『学術維新原理日本』ばかりでなく、かれらの機関誌『原理日本』を探し出して読み漁ったことがある。蓑田をそのあまりの狂信性(ファナティック)ゆえに胸喜と罵倒してよぶだけでは、原理主義に対する批判的な思想を構築できない、とおもったからである。いま、その全集がまとめられたときいて、これでやっと日本=原理主義の学問的研究も緒につくのだな、という思いがする。

柏書房の関連史料

近代日本をトータルに把握するうえで欠かせない史料

『黒龍会関係資料集』(全10巻)

[編集・解説] 内田良平文書研究会(波多野勝・黒沢文貴・斎藤聖二・櫻井良樹)  
A4判上製函入 総3800頁 揃定価(本体170,000円+税5%)

玄洋社の内田良平らが明治34年に創立した黒龍会は、大アジア主義運動の中心的存在であり、日本の大陸進出の代名詞である。本資料集には、『(黒龍会)会報』(明治34年)、『東亜月報』(明治41年)、『内外時事月函』(明治44年)、『亜細亞時論』(大正6~10年)、『The Asian Review』(大正9~10年)の5誌を収録。

薄明の東アジア共同体構想の多面的実態が明らかに

『月刊 東亜連盟 復刻版』(全17巻)

[編集] 東亜連盟刊行会(代表 武田邦太郎) / [解説] 小林英夫

A5判上製函入 総6200頁 揃定価(本体190,000円+税5%) 【オンデマンド出版】

陸軍中将石原莞爾の領導のもと結成された東亜連盟協会の機関紙『東亜連盟』の創刊号(1939年)から最終号(1945年)まで全68号を完全復刻。近衛・東條内閣に対峙し、昭和政治思想史に特異な足跡を残した東亜連盟と戦後永久平和を旗印を掲げるに至った石原莞爾の多面的な思想と運動を解明する基本資料。

# 蓑田胸喜全集 (全7巻)

帝大教授糾弾によりアカデミズムを震撼させた伝説の右翼思想家の実像とは  
今日の大学問題・教育問題を考える上でも有益な視座をもたらす基本資料

蓑田胸喜(一八九四〜一九四六)は、自ら主宰する雑誌『原理日本』(原理日本社発行、一九二五〜一九四四、通巻一八五号)等を舞台にファナティックな言動で滝川幸辰(京都帝大教授)、矢内原忠雄(東京帝大教授)、美濃部達吉(貴族院議員・元東京帝大教授)、河合栄治郎(東京帝大教授)、津田左右吉(早稲田大学教授)らを次々に著書発禁や辞職に追い込み、東京帝大を中心とした教授たちに怖れられた人物です。

その思想と運動は、内外国難非常時においては政党や財閥、特権階級の腐敗よりも、明治以来の帝国大学から発源する欧米崇拜と唯物論的个人主義思想という国体破壊思想の累積を糺す「学術維新(帝大風改革)」という象徴革命こそすべてに優先させなければならぬというもので、日露戦争後の思想の混乱と大正期の革新運動の沸騰の中、せり出してきたものでした。

戦後の左翼・自由主義的知識人は、蓑田胸喜を狂信的右翼の極北・文化犯罪者として最も激烈に怖れ、断罪し、唾棄し、封印してきました。しかし、蓑田という一人の「狂信的」人物のみによって、戦前の帝大、そして社会があれほどひきまわされたということはありえず、そうした全否定と罵倒のみによつては昭和思想史の実像を捉え、その空白を埋めていく作業は難しいように思います。

本全集により、旧制高校時代から最晩年までに蓑田胸喜が遺した文献を一覧でき、その思索の全貌を辿ることがはじめて可能になりました。蓑田胸喜や原理日本社を忘却の深奥から救い出し、狂信化の厚いベールを殺ぎ落とすことにより、近・現代日本史の矛盾・不安・葛藤の再考を迫る貴重な資料となるでしょう。

【本全集の特長】

- 蓑田胸喜(一八九四〜一九四六)が執筆した全単行本(共著も含む)、パンフレット、蓑田主宰の雑誌『原理日本』(原理日本社、一九二五〜一九四四、通巻一八五号)をはじめとする新聞・雑誌掲載論文を可能な限り収録・精査・影印復刻にて発表当時のまま収録した。
- 内容の重複や所蔵不明のため収録を見送った文献も「未収録文献一覧」にて紹介。本全集により蓑田胸喜の思索の全体像が把握できる。
- 熊本県立八代中学校校友会雑誌『白鷺』、旧制五高校校友会誌『龍南会雑誌』に寄稿した文章を収録。これまで知られてこなかった中学・高校時代の蓑田の思想が明らかに。
- 原理日本社同人であり生涯の師でもあった三井甲之(一八八二〜一九五三)に宛てた貴重な書簡も収録。
- 『原理日本』(第七巻)全号の目次を収録。毎号の編輯消息(蓑田胸喜執筆)や掲載広告とあわせ、メディアとしての『原理日本』の全貌が理解できる。
- 各巻には担当編者が文献内容を詳解した「解題」を付した。さらに「蓑田胸喜伝序説」「蓑田胸喜略年譜(第一巻)」「人名索引」(第七巻)を掲載し、利用者の便宜を図った。

お奨めします

- 日本思想史
- 政治学・政治思想史
- 教育学・教育史
- 社会学
- 歴史学
- 日本論

大学図書館  
公共図書館

取扱店

**柏書房**

〒113-0021 東京都文京区本駒込1-13-14  
TEL.03-3947-8251 FAX.03-3947-8255  
URL: http://www.kashiwashobo.co.jp  
E-mail: eigy@kashiwashobo.co.jp

◆ 編集・解説  
竹内 洋己 (関西大学教授)  
佐藤卓己 (京都大学准教授)  
植村和秀 (京都産業大学教授)  
井上義和 (関西国際大学専任講師)  
福岡良明 (香川大学准教授)  
今田絵里香 (日本評論家会 特別顧問)

◆ 造本体裁  
菊判上製・函入  
全7巻・総6566頁

◆ 全巻揃定価  
定価231,000円  
(本体220,000円+税5%) ※分売不可  
ISBN 4-7601-2585-X C3310



# なぜ蓑田胸喜は封印されなければならなかったのか の中で読み解くことで逆に見えてくる、ま

## 【蓑田胸喜略年譜】

**1894年(明治27)=0歳**

1月26日、熊本県八代郡野津村大字川原59番地に生まれる。野津尋常小学校卒業。

**1908年(明治41)=14歳**

4月、熊本県立八代中学校入学。在学中1年留年。4・5年次に特待生。剣道部・雑誌部・演説部・技芸部等で活動。

**1914年(大正3)=20歳**

3月、八代中学校卒業。同期生59人中首席。9月第五高等学校入学(無試験)。同期に佐々弘雄、一年下に向坂逸郎がいた。在学中『龍南会雑誌』に四本の論文を発表。

**1917年(大正6)=23歳**

7月、第五高等学校卒業。第一部独語法律科政治科文科27人中4番。9月、東京帝国大学文科大学哲学科宗教学宗教学史学科入学。

**1919年(大正8)=25歳**

4月、上杉慎吉教授を中心として興国同志会結成。秋頃初めて山梨の三井甲之を訪問、機関誌発行の相談。

**1920年(大正9)=26歳**

1月、森戸事件起こる。伊豆の土肥温泉にて卒業論文執筆中に新聞で事件を知り急遽帰京。興国同志会メンバーとともに森戸処分の運動を展開。3月、東京帝国大学文学部宗教学科卒業。4月、法学部政治学科学士入学。

**1922年(大正11)=28歳**

4月、慶應義塾大学予科教授就任(論理学・心理学担当)。三井甲之主宰『人生と表現』の編集を手伝いつつ、同誌や『日本及日本人』等に論文を寄稿。

**1923年(大正12)=29歳**

12月、山田みずほと結婚。

**1924年(大正13)=30歳**

11月、帝大七生社結成。

**1925年(大正14)=31歳**

11月7日、三井甲之らと原理日本社結成、機関誌『原理日本』創刊。

**1927年(昭和2)=33歳**

4月、慶應義塾精神科学研究会結成、会長就任。『カール・ムース原著 唯物史観の哲学的・経済学的基礎』

**1928年(昭和3)=34歳**

8月、シキシマノミチ会結成。『原理日本』10月号(通巻32号)より新聞紙法により編輯発行。松田福松編『大学より発源する日本赤化思想運動の現状と其学術的折伏』(寄稿)、『独露の思想文化とマルクス・レーニン主義』

**1929年(昭和4)=35歳**

三井甲之『我等は如何にこの凶逆思想を処置すべきか?』(寄稿)、『世界文化単位としての日本』

**1930年(昭和5)=36歳**

『日本人の進路』(共著)

**1931年(昭和6)=37歳**

『随想録』に現はれたる濱口前首相の精神分析

**1932年(昭和7)=38歳**

3月、慶應義塾大学予科教授退職。4月、国士館専門学校教授就任。

**1933年(昭和8)=39歳**

『日本総赤化徴候司法部不祥事件 禍因根絶の逆縁昭和維新の正機』『美濃部博士「憲法摘要」の詭弁詐術的「国体変革」思想』『学術維新原理日本』

**1934年(昭和9)=40歳**

『五・一五事件と日本精神』、『第二 我等は如何にこの凶逆思想を処置すべきか?』、『国維会の指導精神を剖析す』(共著)、『末弘博士告発学術的公開訴状』

**1935年(昭和10)=41歳**

『美濃部博士の大権蹂躪』『天皇機関説を爆破して国民に訴ふ』『美濃部「機関説」の源流 一木博士の反国体思想』『一木枢相・牧野内相の憎冒思想を糾弾す』『美濃部・末弘博士の国憲紊乱思想』『「上からの民主政」に就て』(共著)、『帝大法学部「国権否認論」の法理学的批判』

**1936年(昭和11)=42歳**

『行政法の天皇機関説』『国防・教育・財政一元論』『二・二六事件について』

**1937年(昭和12)=43歳**

『真理と戦争』(共著)、『ファッショと国家社会主義』(共著)、『普遍的世界観と日本哲学』『世界文化史の新展望と新回顧』『永久国防論の原理』『日本精神と科学精神』(共著)

**1938年(昭和13)=44歳**

9月3日、帝大肅正期成同盟結成。『国家と大学』(共著)、『河合教授への公開状』『真の大学問題』『法哲学と世界観』

**1939年(昭和14)=45歳**

『津田左右吉氏の大逆思想 第一』

**1940年(昭和15)=46歳**

『昭和研究会の言語魔術』『ナチス思想批判』『大川周明氏の学的良心に愠ふ』『ナチス精神と日本精神』『日本論理学序説』

**1941年(昭和16)=47歳**

『共産主義思想の検討』『学術維新』『国防哲学』『日本世界観——世界精神歴史』

**1944年(昭和19)=50歳**

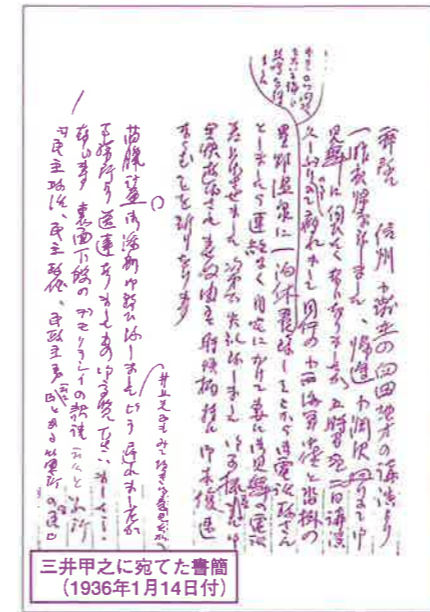
1月号をもって『原理日本』発行停止。六月、熊本へ疎開。

**1946年(昭和21)=52歳**

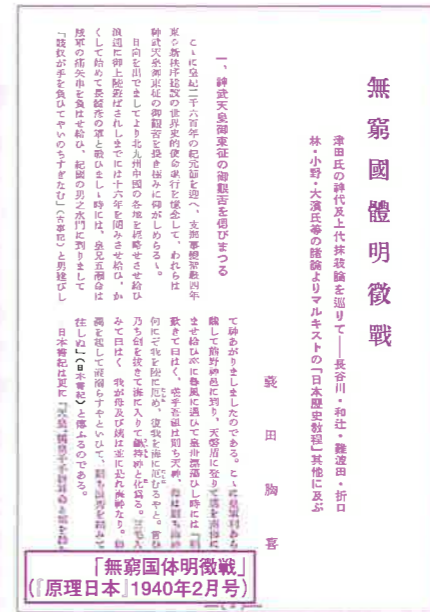
1月30日、熊本県の自宅で縊死。



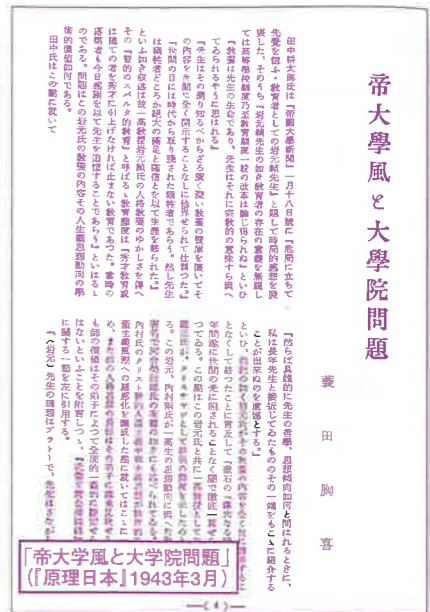
国士館教授時代の蓑田胸喜



三井甲之に宛てた書簡 (1936年1月14日付)



「無窮國体明徴戦」 『原理日本』1940年2月号



「帝大風と大学院問題」 『原理日本』1943年3月

赤思想 共謀本部の確立！ 日學風の清算！

20 年

## 學大と家國

著 喜胸田蓑

## 國防哲學

蓑田胸喜著

東京堂出版

原理日本社

學術維新